湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所　属　薬学部　医療薬学科
名　前　鳥越　一宏
作成日　令和 8 年 5 月 1 日

1. 教育の責任

私は本学薬学部において、薬物治療学、実務実習事前学習、実務実習、チーム医療論、卒業研究等を担当し、薬学教育の基礎から臨床実践、さらに研究的思考の育成までを一貫して担っている。特に、薬物治療学では疾患・薬物・患者背景を統合して考える力を養い、実務実習事前学習では、臨床現場に臨むための知識・技能・態度を段階的に形成することを重視している。実務実習では、学内で修得した知識を患者中心の薬学的判断へと接続し、指導薬剤師と連携しながら学生の学びを支援している。また、チーム医療論では多職種連携における薬剤師の役割を深化させ、卒業研究では臨床上の疑問を科学的に捉え、根拠に基づいて考察する姿勢を育成している。これらを通じて、専門知識を有するだけでなく、患者・家族・医療チームに貢献できる薬剤師の養成に責任を担っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育理念は、学生が「知識を覚える」のではなく、「患者のために知識を使う」ことができる薬剤師へ成長するよう支援することである。薬学教育では、薬理作用、薬物動態、副作用、相互作用、物理化学的特性などの知識が重要であるが、それらは臨床現場で患者の生活、価値観、症状、治療目標と結びついて初めて意味をもつ。したがって、私は授業や実習において、「なぜその薬を選ぶのか」「どのようなリスクを想定するのか」「患者にどのように説明するのか」を学生自身に考えさせることを大切にしている。また、薬剤師は医療チームの一員として、医師、看護師、PT、OT、管理栄養士、公認心理師などと協働し、患者にとって最善の薬物療法を支える存在である。学生には、誠実に学び続ける態度、患者の変化に気づく感性、多職種と対話する力を身につけることを期待している。

2) 理念をもつに至った背景

この理念は、私自身が臨床薬学、がん・緩和医療、制吐剤の研究等を通して患者支援に関わってきた経験に基づいている。痛みや化学療法に伴う副作用、糖尿病などの慢性疾患では、薬物療法の適否が患者の生活の質に大きく影響する。薬剤師は、患者の症状、服薬状況、副作用、生活背景を把握し、必要に応じて処方提案や情報提供を行うことが求められる。特に緩和医療の領域では、痛みや不安、治療継続への迷いなど、患者の身体的・心理的・社会的苦痛に向き合う姿勢が欠かせない。こうした経験から、薬学教育においては、知識と技能の習得に加え、患者の言葉を受け止め、根拠をもって判断し、多職種と協働する力を育てる必要があると考えるようになった。また、実務実習を通じて学生が患者や医療者との関わりから大きく成長する姿を見て、学内教育と臨床現場をつなぐ教育の重要性を強く認識している。

3. 教育の方法・戦略

私の教育方法は、講義、演習、実務実習、卒業研究を相互に関連づけ、学生が段階的に臨床的思考を獲得できるよう設計することを基本としている。4 年次までに学修する薬理学、薬物治療学、薬物動態学、製剤学、医療倫理等の知識を、実務実習事前学習で症例に基づく判断へと発展させ、5 年次の薬局・病院実務実習で実践的に活用できるよう支援している。

方針 1：基礎知識を臨床判断へ接続する

- 薬物治療学では、疾患ごとの標準治療を説明するだけでなく、患者背景、腎機能・肝機能、併用薬、副作用歴、服薬アドヒアランス等を踏まえた薬学的判断を扱う。
- 処方例や症例を用いて、薬剤選択、用量設定、モニタリング項目、患者説明の視点を整理させる。
- 「この患者にとって何が問題か」「薬剤師として何を確認すべきか」を問い、臨床推論を促す。

方針 2：実務実習に向けた準備性を高める

- 実務実習事前学習では、調剤、監査、疑義照会、服薬指導、医療安全、フィジカルアセスメント、コミュニケーション等を統合的に確認する。
- 学生が現場で受け身にならず、自ら目標を設定し、経験を振り返ることができるよう、日誌記載や振り返りの視点を明確に示す。
- 実習前後の学びが連続するよう、事前学習、薬局実習、病院実習、実習報告会を一体的に捉えた指導を行う。

方針 3：患者中心・多職種連携の視点を育成する

- チーム医療論では、薬剤師が薬物療法の専門職としてどのように多職種へ貢献できるかを考えさせる。
- 他職種への情報提供、患者・家族への説明、退院時支援、地域連携など、薬剤師の役割を具体的場面に即して扱う。
- がん支持医療、緩和医療、慢性疾患管理などを題材に、患者の生活や価値観を踏まえた薬学的支援の重要性を伝える。

方針 4：振り返りとアウトカムを重視する

- 実務実習では、「何ができるようになったか」「次にどのように改善するか」を発表できるよう指導する。
- 実習日誌や報告会では、経験の羅列ではなく、課題、行動、結果、省察、今後の課題を構造化して表現することを求める。
- 学生の発表や質疑応答を通じて、他者の経験からも学ぶ姿勢を育てる。

方針 5：研究的視点を教育に還元する

- 卒業研究では、臨床現場の疑問を研究課題として設定し、文献的根拠に基づいて考察する力を養う。
- 臨床薬学、がん緩和医療、PHR (Personal Health Record) 等の研究視点を授業や演習に取り入れ、薬剤師業務を客観的に評価する視点を示す。
- 教育内容についても、学生の理解度、実習での課題、指導薬剤師からの意見を踏まえて継続的に改善する。

4. 学習成果

患者情報、薬物治療学、事前学習を通じて、学生が疾患・薬物・患者背景を関連づけて考える姿勢を身につけるようになった。

実務実習では、学生が現場での経験を通じて、処方監査、服薬指導、多職種連携、患者対応の重要性を具体的に理解する機会を得ている。

実習日誌や実習報告会の指導により、学生自身の成長、課題、今後の改善点を言語化する力を高めている。

チーム医療論では、薬剤師が薬物療法の専門職として多職種に貢献する意義について、学生の理解を深めることができている。

卒業研究を通じて、学生が臨床上の疑問を文献やデータに基づいて検討し、発表・討論する経験を積んでいる。

教育活動を通じて、私自身も、学内教育と臨床現場を接続するためには、事前準備、実習中の支援、実習後の振り返りを一体的に設計することが重要であると再認識した。

5. 改善のための努力

実習日誌・振り返りの質の向上：記載例、評価観点、良い振り返りと不十分な振り返りの違いを示し、アウトカム志向の記述を促す。

多職種連携教育の具体化：臨地でのチーム医療論の実現を目指し、他職種への情報提供や共同意思決定を想定した演習を充実させる。

6. 今後の目標

短期目標として、薬物治療学および事前学習における症例ベース教材を再整理し、処方監査、服薬指導、多職種連携を統合的に学べる演習を充実させる。また、実務実習報告会や日誌指導に用いる評価観点を明確化し、学生が自身の成長を具体的に振り返る仕組みを整える。長期目標としては、学内教育、実務実習、卒業研究を有機的につなぎ、患者中心の薬物療法を実践できる薬剤師を育成する教育プログラムを発展させる。さらに、臨床薬学研究や医療 ICT に関する知見を教育へ還元し、地域医療ならびに多職種連携に貢献できる薬剤師教育の質向上に取り組む。

【添付資料】

各項目の記載内容を客観的に示すためのエビデンスを箇条書きで記入してください。

例） シラバス、開発教材、学生アンケート、テスト原本、レポート課題、講義配布資料、学生の就職先情報、卒業論文タイトル、発表論文、受賞の賞状、研究課題採択通知、など

- Researchmap (https://researchmap.jp/k-torigoe)